

## アダム・スミスの「商業的社会」

中 川 栄 治\*

### 1. 序

アダム・スミスは、『国富論』第1篇第4章冒頭段落において、「分業がひとたび完全に確立すると (thoroughly established), 人が自分自身の労働の生産物によって満たすことのできるのは、彼の欲望のうちのごく小さい部分にすぎなくなる。彼は、自分自身の労働の生産物のうち自分自身の消費を上回る余剰部分を、他人の労働の生産物のうち自分が必要とする部分と交換することによって、自分の欲望の大部分を満たす。このようにして、だれでも、交換することによって生活し、言い換えると、ある程度商人となり、そして社会そのものも、まさしく商業的社会 (commercial society) と呼べるようなものに成長する」(Smith (1976)——グラスゴウ版。以下、WN と略記——, I.iv.1. 大河内訳I, 39頁。訳文は必ずしも邦訳書のもと一致しない。他の文献の邦訳書についても同様)、と述べた。

かつて小林 (1973) は、そこで言及される「商業的社会」について、事実上、次のような見方を示した。

すなわち、『国富論』第1篇第1章にみられるような形で行われる作業場内分業についての議論では、「事業主」のもとにおける資本の蓄積と賃金労働者の存在、資本・賃金労働関係が前提されているはずにもかかわらず、各人がその労働の生産物を交換し合って生活する社会、各人が生産者であることによって商人であるよ

うな社会、したがって産業社会であってそれゆえ同時に交換社会であり、しかも、資本主義社会でも資本主義以前の社会でもなく、「独立生産者のみが形成する満開した商品生産の社会」といった矛盾した不安定な内容を持つ、一つの社会モデルとしての「商業的社会」、といったものである<sup>1)</sup>。

そして小林は、『国富論』は資本主義の経済理論的分析を商品の交換価値の分析から始めるのであるが、この分析に着手する直前に、資本制社会の原型だとスミスが考えた、そうしてそういう抽象化のゆえに不自然であることを免れない、「商業的社会」、すなわち独立生産者のみが形成する満開した商品生産の社会の概念を、モデル化してすえた、また、スミスが第4章冒頭で、すなわち自己の体系の戸口に、「商業的社会」というモデルを置いたのは、ジェイムズ・ステュアート (James Steuart) 的理論体系からの訣別を宣言するためであった、とし<sup>2)</sup>、『国富論』第1篇第4、第5章ではそのモデルの枠組みの中で議論が展開された、とみる<sup>3)</sup>。

また、小林によれば、『国富論』第1篇第6章冒頭の「初期未開の社会状態 (early and rude state of society)」, ビーバーと鹿とが交換される「狩猟民族」の社会は、「分業が完全に確立した」社会、すなわち「商業的社会」とは別のものであり、後者は農工分離の完成した社会であるに対し、前者は農工分離に、いな農業自体にさえ先立つ社会であって、この意味からは、「商業的社会」は「文明社会」に属し、「初期未開の社会状態」とはむしろ対立するもの、とみられ、また、「初期未開の社会状態」、すなわち

\* 広島経済大学名誉教授

商品生産がまだ存在しない社会、ともみられる。そして、スミスは『国富論』第1篇第6章で、「商業的社会」に代えた「初期未開の社会状態」を指定することから、そこでの理論展開を始めた、とみられる<sup>4)</sup>。

なお、小林は、別の著作(1976b)で、社会的分業が商品生産という形で発展した社会を、スミスは「文明社会」と呼び、その素朴な段階を「初期未開の社会状態」と呼んでいる、とするとともに、スミスのいう「初期未開の社会状態」とは、原始社会のことではなく、単純商品生産者だけが形成する社会を啓蒙主義的用語で表現したものである、ともしている。また、小林(1976b)は、この所説を記したもともとの論説では「商業社会」としていたが、その論説をこの著作に掲載するに際し、「商業社会」を「商業的社会」に修正したのであり、その理由は、『国富論』での commercial society とは、基本的には商品生産者からなる社会であって、商品生産がこの社会に商業的性格を与えるのであり、それは単なる商人の社会ではないから、ともしている<sup>5)</sup>。

筆者は、本稿注1で言及した中川(1977)の「結びに代えて」の最終部分において、第4章冒頭の「商業的社会」概念の内容に言及する際、「独立生産者のみが形成する満開した商品生産の社会」という把握に多少の違和感を覚えつつも、小林(1973)の線に沿った理解をとった<sup>6)</sup>。

筆者は、上述論文で『国富論』冒頭における分業論を扱ったのち、分業論→交換・商業の普遍的用具としての貨幣についての議論をうけて展開されることとなる価値・価格に関するスミスの議論の検討に進む予定であった。そしてそのためにはそれに関する欧米での諸研究をみておくことの必要性が痛感されたため、まずその作業に入ったのであるが、結局そのために約40年の時間が経過した。

その間、筆者は欧米での諸研究から多くのこ

とを教えられると同時に、多くの新たな疑問を持つこととなった。

本稿は、あらためて1977年の時点にいた場所に立ち帰り、そこで予定していた研究を進める最初のものであり、まず、スミスの議論における「商業的社会」を取り扱おうとするものである。

## 2. 労働者・独立生産者・親方資本家が入り混じって活動する「商業的社会」

上述のように、筆者は、1977年の時点では、「独立生産者のみが形成する満開した商品生産の社会」という一社会モデルとしての「商業的社会」、といった理解をとったのであるが、その後、その判断に疑問を持つこととなった。現時点で筆者が考えていることが最も良く表現されていると思えるのが、本節の表題に示されるような生越(2020)の提示する理解である。

生越は例えば以下のような理解を示す。

すなわち、スミスのいう「商業社会 (commercial society)」は、独立生産者だけからなる平等社会ではなく、資本主義社会と重なりながら、労働に従事する人々に支えられて、不平等にもかかわらず、一般的富裕を実現する社会として提示されている。しかし、スミスは、労働を商品として販売する労働者さえも、商業社会における交換関係の中では、あたかも対等な取引に参加するかのように現れる市場参加者となり、その結果「だれもが商人になる」のであって、そこに相互依存関係を見出した。それゆえ、その中心的担い手を、自らの労働生産物の余剰分を交換する自由な独立生産者によって代表させ、賃金労働者をその中に包摂したのである。それは現実から離れた全く架空のモデルではなく、現実を踏まえたうえで、「交換による相互依存関係」を抽出して構成された理念型であった。それは、労働が富を生み出す基盤であること、労働の担い手が様々な職業労働に

よって生産物を生産し交換し合うことを強調するためのものであり、その「相互依存関係」の特色を表現するために構成された抽象概念だったのである<sup>7)</sup>。

また生越は、スミスの資本・賃金労働関係や三階級三分配関係の認識は、あくまで機能分析上のことであって、現実の所得や階層形態がこの概念にぴったり一致するわけでないことを、スミスは十分承知していたとし、その例として、スミスの議論における、地主・資本家・労働者の役割を兼ねる農業資本家、親方と職人の役割を兼ねる独立の製造業者、一貫して資本の下で働くわけではなくて少しでも豊かになれば独立しようとする労働者といったことに関するスミスの言及を具体的に挙げる<sup>8)</sup>。そのうえで生越はまた、「商業社会」に関して以下のようにも述べる。

すなわち、スミスの場合、資本機能と労働＝生産機能とは、現実の担い手の中で複雑に絡み合い、三階級が純粋な形態で存在するわけではなかった。賃金労働者も独立生産者になりうるし、独立生産者が労働の成果を蓄積しつつ、その資材によって労働者を雇い親方資本家にもなりうるものであり、三階級三分配が成立している資本主義社会だとしても、労働者も独立生産者も親方資本家も入り混じりつつ活動しているのである。それゆえ、スミスが「商業社会」を独立生産者からなる社会として描いたのは、この面を象徴的に表現するためであったと思われる。スミスにとって、資本主義社会は労働生産物がすべて労働者のものにならない不平等社会ではあるが、そこで営まれる市場と交換においては、いかなる人も（労働者も）財産所有者として対等に参加するのであって、その限りでは三階級三分配は正当なものとして評価される。スミスの「商業社会」概念は、商業社会にも資本主義社会にも、一貫して対等な相互依存関係が成立しているという事実を示すために、独立生産者

の関係を象徴的に描いたものなのである、というわけである<sup>9)</sup>。

なお、筆者は、スミスの議論における commercial society を商業的社会として捉えるのであるが、それは、1 中でみた小林（1976b）に似て、単なる商人の社会ではなく、その構成員が商業的性格をそなえた社会と捉えたいという意図からのものである。

### 3. 『国富論』第1篇第4章

『国富論』第1篇第4章「貨幣の起源と使用について」の第1段落で、本稿1冒頭でみた「商業的社会」に関するスミスの文言が示される。そして、続く第2段落から、第5章後半のスミスの時代に至る鑄貨に関する議論および第2篇第2章中のスミス貨幣論とは別に、分業が確立した商業的社会における商業の普遍的用具としての貨幣の起源と使用に関するスミスの議論が示される。ここで、第2段落からの、第4章での議論を手短かにみておくこととする。

分業発生当初には、例えば所有者 A と所有者 B はともに、交換に供しうる余剰物を持っており、また、A はその余剰物を B の余剰物と交換することを希望したとしても、もし A の余剰物が B の望む物でなかった場合には、両者の間には交換は成立しえない。このような不便を避けるために、人は、自分の労働の生産物とともに、他人が交換を拒否しそうにない特定の商品を手許に置くという方法を考え出す。こういった目的のために、交易の共通の用具として様々な商品が考え出され、またその商品で物の価値が測られることとなる。例えば、家畜（社会の未開時代：rude ages of society；例えばディオメデスの時代）、塩、ある種の貝殻、干鰯、タバコ、砂糖、獣皮またはなめし皮、釘、といったものである。そして最終的に選ばれることになったのが金属類（metals）である（WN, Liv.2-4. 大河内訳 I, 40-41頁）。

そのようなものとして金属類を選ぶことになったのは、他の商品よりも腐敗しにくいということ、また、無駄なく分割可能であるとともに熔解によって容易に再結合可能、ということによるのであるが、この後者の性質こそが、金属類を商業と流通の用具に適したものにしている。そして、様々な金属類が、そのような目的のために様々な国民によって使用されてきた。例えば、鉄（古代スパルタ人）、銅（古代ローマ人）、金銀（すべての富裕で商業的な国民）、といったように（WN, Liv.4-5. 大河内訳 I, 41-42頁）。

金属類が商業と流通の用具、貨幣の機能を果たすものとして使用された当初は、刻印も鋳造もされていない粗製の延べ棒が用いられていたが、そこには、重量測定および純度測定の煩雑さという不便があった。詐欺、ごまかし等の弊害防止、交換の容易化、産業・商業の促進のために、改良へのかなりの進歩（considerable advances towards improvement）を遂げた国々では、流通の用具として使用されていた金属の一定量に公的刻印を押すこととなった。これが、鋳造貨幣の起源であり、造幣局と呼ばれる役所の起源である（WN, Liv.6-7. 大河内訳 I, 42-44頁）。

まず、純度を表示する刻印が押されるようになり、その後、純度と重量を表示する刻印が押されるようになった。この鋳貨制度のもと、鋳貨は個数で受領可能ということになった（WN, Liv.8-9. 大河内訳 I, 44-46頁）。

なお、もともとは鋳貨の名称は、含まれる金属の重さ、分量を表現していた（例えば、イングランド正貨の1ポンド等）のであるが、世界の国々では、君主や主権国家の貪欲と不正が、国民の信頼を悪用し、鋳貨中に含まれていた金属の正味の分量を徐々に減らしていった。君主や主権国家は、それによってより少ない銀で債務支払い、契約履行をしてきた。またその国の

他の債務者も、旧鋳貨で借りたものを改悪された新鋳貨の同一名目額で支払ってよいという同一特権が許されていた。そのような操作は、債務者にとっては好都合であるが、債権者にとっては不利で、ときとして、私人の財産に大変化をもたらしてきた（WN, Liv.10. 大河内訳 I, 46-48頁）。

このような過程を経て、貨幣が、あらゆる文明国（all civilized nations）において商業の普遍的用具となったのであり、この用具の媒介によってあらゆる種類の財貨が売買され、相互に交換されることになったのである（WN, Liv.11. 大河内訳 I, 48頁）。

スミスは、以上のような形で、分業と交換によって支えられる「商業的社会」という概念を提示し、そしてその交換を容易にするものとしての貨幣の起源と使用を説明するのであるが、次いでスミスは、財貨を貨幣と交換したり財貨を相互に交換したりするに際して人々が自然にまもる原則（rules）、財貨の相対価値あるいは交換価値と呼ばれるものを決定（determine）する原則を論じるとし、いわゆる「価値のパラドックス」への言及をつうじて、研究対象を「使用価値」ではなく「交換価値」とすることを明示しようとする（WN, Liv.12-13. 大河内訳 I, 49-50頁）。

そしてスミスは、諸商品の交換価値を規制（regulate）する原理（principles）を究明するために、第一に、この交換価値の真の尺度（real measure）は何か、商品の真実価格（real price）は何にあるか、第二に、この真実価格の構成部分は何か、第三に、この真実価格の構成部分の幾つかあるいはすべてを、時には、その自然率（通常率）以上に引き上げたり、以下に引き下げたりする事情は何か、あるいは、諸商品の市場価格（現実の価格）がそれらの自然価格と一致するのを時として妨げる諸原因は何かを、明らかにすることを試み、その各々の試

みを第5、第6、第7章でなす計画を示すのである (WN, Liv.14-18. 大河内訳 I, 50-51頁)。

#### 4. 『国富論』第1篇における第4章

上のようなものとしての第4章は、『国富論』第1篇のなかでどのような位置を占めるのか。

スミスは、『国富論』の「序論および本書の構想」中で、国民が享受できる「生活の必需品と便益品」の多さを規定するもの〔国民の物質的富裕の程度を規定するもの〕を、消費者数に対する、労働によって直接・間接にもたらされる「生活の必需品と便益品」の総量の割合の大小とする。またスミスは、「地味、気候、国土の広さ」といった外的条件〔重商主義がその拡充を図ろうとしてきた外的条件〕を所与とする時にその割合を規定するものは何かという形で問題を立て、その規定要因として①労働の生産性の程度、②国民のうち「有用な労働 (useful labour) に従事する人々の数と、そのような労働に従事しない人々の数との割合」を挙げ、そして、①の事情のほうがより重要な規定要因であるとする。その際スミスは、次のような事情を示すことによって、それを説明しようとする。「狩猟民や漁撈民からなる野蛮民族 (the savage nations of hunters and fishers) の間では、労働に耐えることのできるものはだれでも、多かれ少なかれ有用労働に従事して、……できるだけ生活の必需品と便益品を供給しようと努力する。けれども、そのような民族ははじめなほどに貧しい……。これに反して、文明が進み繁栄している国民 (civilized and thriving nations) の間では、多数の人々はぜんぜん労働しないのに、このうちの多くの者は、働いている人々の大部分に比べて10倍もの、しばしば100倍もの、労働生産物を消費する。それでもなお、その社会の全労働の生産物はたいへん豊富なので、すべての人々に対する供給は豊かな場合が多く、最も低く最も貧しい階層 (order) の職人 (work-

man) ですら、もし彼が儉約家で勤勉であるなら、どんな野蛮人 (savage) が享受できるよりも多くの生活の必需品と便益品の分け前を享受できるほどなのである」、というわけである (WN, [I].1-4. 大河内訳 I, 1-2頁)。

そして、「労働の生産力における改良の原因と、その生産物が国民の様々な階級 (ranks) の間に自然に分配される秩序について」を表題とする第1篇でスミスは、上のような「文明が進み繁栄している国民」のそのような物質的富裕を支える第一の柱である高度な労働生産性は、分業の進展によってもたらされるものであった、とする。例えば第1篇第1章末の部分では、「よく統治された社会 (well-governed society) では、人民の最下層にまで広く富裕が行きわたるが、そうした富裕を引き起こすのは、分業の結果として生じる、様々な技術による生産物の巨大な増加にほかならない」、とされ (WN, Li.10. 大河内訳 I, 20頁)、また、「文明が進み繁栄している国 (civilized and thriving country)」での労働の分割と結合との関連で、「文明国 (civilized country) の最も下層の者に対してさえ、何千人という多数の助力と協同 (co-operation) がなければ、手軽で単純な様式だと我々が誤って想像しているような普通の暮らしぶりすらととのえてやることはできない……。たしかに、身分や地位の高い人たちの法外な贅沢に比べると彼の暮らしぶりは、疑いもなく大いに単純で手軽にみえるにちがいないが、それでも、多分次のことは真実であろう。すなわち、ヨーロッパの君主の暮らしぶりが勤勉で儉約な農夫 (peasant) のそれをどれほど凌いでいようと、その程度は、この農夫の暮らしぶりが、一万人もの裸の野蛮人 (naked savages) の生命と自由の絶対的支配者であるアフリカの多数の王侯の暮らしぶりを凌ぐほど大きいとはかぎらない、ということである」、とされる (WN, Li.11. 大河内訳 I, 22-23頁)。

そして、「文明が進み繁栄している国」にそのような富裕をもたらす分業は、スミスの場合、事実上、商品生産者間の社会的分業、すなわち、独立商品生産者にくわえ、作業場内分業を組み入れた商品生産者の混在のもとでの、商品生産者間の社会的分業であった。そこでは事実上、作業場を所有する事業主、作業場で働く職人、その職人が使用する生産手段の存在が、当然のこととなっているのである。そこで扱われる商品には、事実上、独立生産者の供給する商品とともに、そのような事業主の供給する商品が存在するのである。そしてスミスは、そのような様々な商品の供給という形で行われる（社会的）分業に参加する主体の心的契機となっているものを、他者からの強制や他者への博愛心でなく、人間にそなわる交換性向および自愛心とし、また、そのような分業を支えるのが、市場における交換であり、その分業と交換（市場）は相互連関的に進展する可能性を持つ、とみる〔なお、論理的には、市場との相互依存関係は、商品生産者間の社会的分業は直接的、作業場内分業は間接的であり、また、両分業間には相互促進的側面がある〕（『国富論』第1篇の第1章から第3章）。

スミスの場合、第1篇の表題中の「労働の生産力における改良の原因」の部分は分業によって説明されるわけであるが、その問題から「その生産物が国民の様々な階級の間に自然に分配される秩序」の問題への移行は、「文明が進み繁栄している国」の富裕をもたらす分業、それを支える交換、といった脈絡で、交換の論理についての議論を経由してなされることになっている。

スミスは、第1篇第4章の冒頭で、「商業的社会」についての文言を示し、分業と交換によって支えられる「商業的社会」という概念で彼が分析の対象とする社会の性格を特徴づけ、また、そこで商品の価値を測り、交換の手段・

媒介物として使用されている貨幣の起源と、それが商業の普遍的用具となってきた過程に論及し、そしてそのうえで、その貨幣の奥にある交換の論理を扱う際の手順を明示しようとしたのである。

## 5. 「商業的社会」の含意

スミスは、『国富論』第1篇第1章から第3章での分業論では、個々の生産主体における直接の消費を超える資材と、市場との存在、それらを基礎付ける所有権の確立といったことを問題にしていない。むしろそれらの条件が所与のものとして議論を展開している<sup>10)</sup>。スミスが「文明が進み繁栄している国」の富裕を説明する分業を語る際、その分業は、個々の生産主体は各々の商品を生産する形で社会的分業を行うとともに、事実上、一方の生産主体内においては工程等における分業・作業場内分業を行う形での商品生産がなされ（例えば、ピン製造）、他方の生産主体内では独立の生産者としての商品生産がなされるのであった。スミスが現実にも描いていた分業は、そのような分業であった。第4章の冒頭の文言では、その分業を支える交換の論理に関する議論に向けて、交換という商業的性格を強調することが意図されていた。

それゆえ、そこで考えられている、交換と相互に支え合う分業の完全に確立された社会としての、「商業的社会」という表現そのものは、厳密な意味での「独立生産者のみが形成する満開した商品生産の社会」というよりも、むしろ、スミスが目前にしていた社会の商業的性格という側面を示すために用いられたもの、と理解するほうが、スミスの意図に沿うことになる。すなわち、その社会は、作業場内分業も行われる社会、事実上、資本の存在する社会、労働・資本・土地の各々の用役も売買の形で交換される社会であるとともに、独立の商品生産者の存在する社会である（今日という市場経済におい

ても、その構成員については同様なことはいえる)。そしてその社会の地主階級、資本家階級、労働者階級および独立の商品生産者たちの間には（とりわけ後者の三グループの間には）、物質的にも精神的にも相互の流動性が多く残り、その社会の構成員の間では精神的な立場の交換も容易であることが確保されているのである。このような点で、その社会は、リカードウ、マルサス段階、さらにマルクス段階で分析対象として想定される社会モデルとは異なるものである<sup>11)</sup>。

その「商業的社会」では、前でみた生越(2020)のいうように、労働を商品として販売する労働者さえも、その社会における交換関係の中では、対等な取引に参加するかのように現れる市場参加者となり、その結果「だれもが商人になる」のである。またそこでは、賃金労働者も独立生産者になりうるし、独立生産者が労働者の成果を蓄積しつつ、その資材によって労働者を雇い親方資本家にもなりうるものであり、三階級三分配が成立しているとしても、そこでは、労働者も独立生産者も親方資本家も入り混じりつつ活動しているのである。そこで営まれる市場と交換においては、いかなる人も（労働者も）財産所有者として対等に参加するのであって、その限りでは三階級三分配は正当なものでありうるものであって、地主、資本家、労働者はともに私有財産所有者であり、彼らの各々の報酬は、独立生産者の報酬とともに正当な報酬、ということになりうるのである。

その「商業的社会」では、地主、資本家、労働者の地代、利潤、賃金、また独立生産者の所得は、自由な競争のもとで生じる自然率のものである限り、社会的に自然なものとして是認を得ることが可能なのである。

その社会の構成員は、支配と従属ではなく、私有財産所有者として互いに、自由、平等、独立した関係にあり、その社会は、私有財産の交

換をつうじて、金銭的考慮に基づく交換をつうじて営まれる社会である。同時に、その社会は、生まれ、家柄、身分、地位等封建的諸束縛から解放された社会でもある。

スミスは、第1篇第4章で、まず、このような含意を持つ「商業的社会」という概念によって彼が分析の対象とする社会の性格を明示し、次いで、商品価値の測定手段、交換の手段・媒介物としての貨幣の起源と、それが商業の普遍的用具となってきた過程に論及する。そしてそのうえで、スミスは、「商業的社会」においてその貨幣的現象の奥にある交換の論理の解明に向かうべく、その手順を明示しようとしたのである。

なお、本稿3でもみたように、スミスの示すその手順では、続く第5章は交換価値の真の尺度を扱うことになる。

その第5章の第1段落でスミスは、「分業が……徹底的に行きわたるようになったあと（after the division of labour has...thoroughly taken place）」（WN, I.v.1. 大河内訳I, 52頁）の社会（つまり、商業的社会）での真の価値尺度を支配労働とし、そして、例えば第2段落および第7段落において、事実上、独立生産者や労働者という労働を行う人々の見方に沿いつつ、真の尺度を支配労働とするその根拠を示そうとしている。スミスの場合、その社会では、労働を行う人々にとっての労働の主観的側面・労働に伴う労苦・骨折り等といったことは、その社会の構成員の間では、総じて、想像・推測可能、共有可能なものであった。スミスはそこでは、その社会の構成員が共有しようと彼が考える視点から、商品価値、労働の労苦・骨折りに言及することによって、価値尺度としての支配労働を根拠づけようとしているのである。

このような理解からすれば、第5章第1、第2段落はスミスが「支配労働」と「投下労働」を混同している箇所（そして第7段落は、スミ

スが価値可変的であるはずの労働を価値不変としている箇所)とする必要はない<sup>12)</sup>。また、その第1, 第2段落での議論がそのような混同を犯していないことを保証する社会を, ことさらに捜す必要もない, ということにもなる。

## 6. 文明社会および未開社会

本稿1中で, 小林の二著書での, スミスの議論における「商業的社会」, 「文明社会」および「初期未開の社会状態」に関する言及をみたのであるが, ここでは, 以上でみてきたスミスの「商業的社会」概念との関連で, スミスの議論における「文明社会」および「未開社会」をみておくこととする。

本稿4中でもみたように, スミスは、『国富論』の「序論および本書の構想」中で, 「狩猟民や漁撈民からなる野蛮民族」あるいは「野蛮人」との比較で, 不平等ではあるが物質的により豊かな国民としての「文明が進み繁栄している国民」に言及する (WN, [I].4. 大河内訳 I, 2頁)。

第1篇第1章では, 例えば, 「社会の未開状態 (rude state of society)」におけるのと比べて, 最高度に作業・職業の分化 (separation) が進んでいる「最高度の産業と改良を享受する国々 (countries which enjoy the highest degree of industry and improvement)」, 「改良された社会 (improved society)」に言及され, また, 農業に比べ製造業への分業導入のより大なる容易さによる, 改良された社会・「富裕な国 (opulent nations)」・「富んだ国 (rich country)」の製造業の, 「貧しい国 (poor country)」の製造業に対する大きな優越性, といったことに言及される (WN, I.i.4. 大河内訳 I, 13-15頁)。また, 本稿4中でもみたような, 分業の結果としての「よく統治された社会」における社会の最下層にまで行きわたる富裕 (opulence), といったことに言及され (WN, I.i.10. 大河内訳 I, 20-

21頁), さらに, 労働の分割と結合の進行をつうじての, 「文明が進み繁栄している国」・「文明国」における, 裸の野蛮人とその支配者を大きく凌ぐ暮らしぶり, といったことに言及される (WN, I.i.11. 大河内訳 I, 21-23頁)。

第2章では, 自愛心と交換性向に基づく交換をつうじて必要とする他人からの協力と援助を得て生活する「文明社会」の人間, といったことへの言及がなされ (WN, I.ii.1-2. 大河内訳 I, 24-26頁), 主な生業 (chief business) としての武器作り, 大工, 鍛冶屋や真鍮工, また, 野蛮人たちの衣類の大きな部分を占める獣皮の, なめし工や仕上げ工, といった言及がなされる (WN, I.ii.3. 大河内訳 I, 28頁)。また, 第3章には, 「現在我々がみるとおりの野蛮で未開な状態 (barbarous and uncivilized state)」といった表現がみられる (WN, I.iii.8. 大河内訳 I, 37頁)。

そして, 第4章には, 本稿3でも触れたように, 家畜が交易の共通の用具であったといわれる「社会の未開時代 (rude ages of society)」といった言及 (WN, I.iv.3. 大河内訳 I, 40頁), すべての富裕で商業的な国民 (all rich and commercial nations) の間での商業の共通の用具としての金銀といった言及 (WN, I.iv.5. 大河内訳 I, 42頁), 流通の用具として使用されていた金属の一定量に公的刻印を押すこととなった改良へのかなりの進歩を遂げたすべての国々 (all countries that have made any considerable advances towards improvement) といった言及 (WN, I.iv.7. 大河内訳 I, 44頁), そして, 「あらゆる文明国において商業の普遍的用具となった」貨幣, といった言及 (WN, I.iv.11. 大河内訳 I, 48頁) がみられる。

『国富論』の第1篇第4章までに, 例えば以上のような, 「文明社会」および「未開社会」に関連するスミスの言及がみられるのであるが, それらの言及をとおしての基調の一つは, 「未

開社会」に比べ、「文明社会」においては作業場内での作業の分化、および、社会の中での異なる商品を扱う職業の分化が行われ、貨幣が取引・交換の普遍的用具として使用され、物質的豊かさが実現されている、といったことである。

このような観点からいえば、分業が確立した社会としての「商業的社会」は、「文明社会」と重なる要素を持つとともに、「未開社会」に対しては、対比対象という要素を持つものといえる。

なお、スミスは第6章の冒頭で、「資本 (stock) の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態 (early and rude state of society) のもとにおいては、種々の物の獲得に必要な (necessary) 労働量の間の比率が、これらの物を相互に交換するにあたっての原則 (rule) を提供しうる唯一の事情であると思われる。例えば狩猟民族の間で、一匹のビーバーを仕留めるのに、一頭の鹿を仕留める労働の二倍がふつう費やされているとすると、一匹のビーバーは当然、二頭の鹿と交換される、すなわち、二頭の鹿の値打ちがある (worth) ことになるであろう。ふつう二日分または二時間分の労働の生産物であるものが、ふつう一日分または一時間分の労働の生産物であるものの二倍の値打ちがあるというのは、当然である」と述べる (WN, I.vi.1. 大河内訳 I, 80頁)。

本稿1でみたように、小林 (1973) の場合には、その第6章第1段落中の「初期未開の社会状態」、「狩猟民族」の社会は、「分業が完全に確立した」社会すなわち「商業的社会」とは別のものであり、後者は農工分離の完成した社会、前者は農工分離さらに農業自体にさへ先立つ社会であり、この意味で、「商業的社会」は「文明社会」に属し、「初期未開の社会状態」とはむしろ対立するもの、とみられる。また、「初期未開の社会状態」すなわち商品生産がまだ存在しない社会、ともみられ、さらに、スミスは

第6章で、「商業的社会」に代えた「初期未開の社会状態」を指定することから、そこでの理論展開を始めた、ともみられるのであった。

筆者は、『国富論』第1篇第4章までの、「文明社会」および「未開社会」に関連するスミスの諸言及からして、分業が確立した社会としての「商業的社会」は、「文明社会」と重なる要素を持ち、「未開社会」に対しては、対比対象という要素を持つものとみるのであるが、筆者はまた、スミスの議論におけるその「未開社会」は、「商業的社会」よりはるか以前に存在したのであろう一社会モデルとしての「未開社会」、また他の地域に残存したのであろう一社会モデルとしての「未開社会」であって、それは、スミスの分析対象である「商業的社会」の分析を際立てるための分析装置の役割を担うものであって、それ自体はスミスの分析対象、主要関心事ではなかった、とみる。

スミスは、例えば第1篇第8章で、「労働者が自分自身の労働の全生産物を享受した事物のこうした原始的状态 (original state of things) は、ひとたび土地の占有と資本 (stock) の蓄積が始まると、いつまでも続くわけにはいかなかった。そういうわけで、この原始的状态は、労働の生産力に最も著しい改良が行われるずっと以前に、終わりを告げていたのである。この状態が労働の報酬つまり賃金にどのような影響を与えたかを、さらにたどっても無益だろう」と述べている (WN, I.viii.5. 大河内訳 I, 111頁)。

スミスの関心事は、「原始的状态」(未開社会)ではなく<sup>13)</sup>、資本の蓄積と土地の占有が行われ、作業場内での作業の分化、および、社会の中での異なる商品を扱う職業の分化が行われ、貨幣が取引・交換の普遍的用具として使用される「文明社会」、それと重なる分業の完全に確立した一社会モデルとしての「商業的社会」なのである。

そして第1篇第5章の分析は、「分業が……徹底的に行きわたるようになったあと」の社会での真の価値尺度に向けられるのである。

## 7. 他 の 諸 見 解

小林（1973）の場合には、スミスの議論における「商業的社会」は、「文明社会」に属し、「初期未開の社会状態」=「狩猟民族」の社会とは対立するものであり、また、小林（1976b）の場合には、本稿1でみたように、スミスは社会的分業が商品生産という形で発展した社会を「文明社会」と呼び、その素朴な段階を「初期未開の社会状態」と呼んでいるとされるとともに、スミスのいう「初期未開の社会状態」とは、原始社会のことではなく、単純商品生産者だけが形成する社会を啓蒙主義的用語で表現したものの、ともされていた。

それに対し筆者は、スミスの議論における「文明社会」、「商業的社会」、「初期未開の社会状態」といったことに関して以上のような見方をとるのであるが、以下で、この問題に関連する他の先行研究の幾つかに触れさせていただく。

### 7.1 小沼（1983a, 1983b）

例えば、小沼（1983a, 1983b）の場合は、スミスの「商業社会」概念は、彼の社会発展の四段階説（狩猟・牧畜・農業・商業）における第4段階に対応した社会モデルとされつつ、事実上以下のような見方がとられる<sup>14)</sup>。

すなわち、小沼によれば、スミスは『国富論』第1篇第5、第6、第7章において交換価値論を展開する際、一貫して、自由で平等な人々からなる分業=交換社会としての「商業社会」を想定していた、とされるとともに、スミスの議論における「商業社会」は、独立生産者のみによって構成される社会でもなければ、資本・賃金労働関係だけがみられるような純粋な資本主義社会でもなく、独立生産者と賃金労働者との

混在と相互転換を許すような社会、とみられる。

そのうえで、スミスは「商業社会」を二つに区分し、第1篇第5章には、生産要素が労働だけの「単純化された商業社会」としての、「社会の初期未開の状態」を想定する場合も、例えば第8段落のように、賃金労働者を想定していると思われる箇所等、土地・労働・資本の三生産要素を考慮した場合もあり、スミスはそれら二つの場合を論理上分けて考えていた、とされる。また、第6章冒頭における「社会の初期未開の状態」は、歴史的実在としての原始社会のことではなく、この「単純化された商業社会」のことを意味する、とされる。

そしてこの小沼の場合、スミスは、第1篇第5章第1、第2段落では支配労働=価値尺度説を展開しており、特に第2段落では、単純なモデルとしての「社会の初期未開の状態」を想定したうえで、商品に投下された労働量はその商品の支配労働に等しいということを論じている、とみられるのであって、そこでの「支配労働」と「投下労働」の等置には、論理上の問題はない、ということになるのである。

### 7.2 星野（2018, 2019）

星野（2018）の場合は事実上、「文明社会」=資本制社会=資本蓄積社会、「商業社会」=独立商品生産者社会、そして「未開社会」は「商業社会」に含まれる、ということになる。

すなわち、星野（2018）の場合には事実上、スミスの議論における「商業社会」とは、一種の理念型であり、資本制社会から資本・土地所有を省いた（捨象した）労働一元化社会、独立生産者社会、道具・原料のような過去労働の成果（資本財）を省いて、労働（力）関係だけで成り立つ交換社会、抽象化された労働（力）関係社会、独立商品生産者間での分業により労働（力）に応じた等価交換の行われる社会であって、それは「未開社会」をもその内に含むもの、

ということになる。そしてその「未開社会」は、単なる歴史上のそれではなく、歴史性を捨象したもののとしての「未開社会」が、「商業社会」に含まれ、また、文明社会の論理的始原としての理論モデルを提供している、ということになり、また、「商業（未開）社会」といった表現もとられることとなる。そして、「文明社会」は、資本制的な社会——「文明（資本蓄積）社会」——、ということになる。さらに、『国富論』初頭の商業社会論で貨幣理論を提起している箇所として『国富論』第1篇第4、第5章が挙げられ、『国富論』の「序論」は資本制的な「文明社会」を主対象としている、といった見方がとられるのである<sup>15)</sup>。

そして、星野（2019）でも、例えば、『国富論』冒頭諸章での「商業（独立商品生産者）社会」,「文明（資本蓄積）社会」といった表現がとられるとともに、そこではまた、以上でみてきたような理解に基づき、「スミス価値論は「文明社会」を律する「投下された労働」（「元本」）による付加価値論に一元化され、「商業社会」はその基礎概念を設定する場として位置づけられる」とされる。スミスの議論における「用いられる（employed）労働」と「投下された（bestowed）労働」とは区別して理解されるべきことを強調する星野独自の解釈が展開されるのである<sup>16)</sup>。

### 7.3 カーリル（1991）

以上のものとは独立に、カーリル（1991）は、スミスは非資本主義社会と資本主義社会との区別を『国富論』第1篇第6章まで明示していないけれども、第5章でのスミスの議論の暗黙裡の枠組みとなっている社会は、「非資本主義的交換（non-capitalist exchange）」の行われる社会、利潤・地代のない、自営生産者たちの経済における、非資本主義的交換——利潤および地代の獲得というよりもむしろ消費を目的とし

た交換——の行われる社会、と捉え、そして、第6章冒頭で言及される「初期未開の社会状態」を、事実上、そのような「非資本主義的交換」の行われる社会と重なるものとみる。またカーリルは、『国富論』第1篇第5章の文脈は非資本主義的交換であり、その際非資本主義的交換と資本主義社会的交換との区分は、資本の存在の有無という視点からの区分であって、スミスの歴史の四段階説における時代区分とは異なるものである、とするとともに、「商業的社会」というスミスの用語は、その歴史の四段階説の脈絡中のもの、とみるのである<sup>17)</sup>。

カーリル（1991）の場合は事実上、『国富論』第1篇第5章から、第6章冒頭の「初期未開の社会状態」の部分までが非資本主義的交換を扱い、第6章のそれ以後が資本主義的交換——利潤および地代の獲得を目的とした交換——を扱う、とみられ、他方、「商業的社会」は、スミスの歴史の四段階説における時代区分とかかわるものであって、非資本主義的交換と資本主義社会的交換との区分とは別の脈絡にあるもの、とみられるのである。

## 8. 結 論

筆者は、『国富論』第1篇第4章までの議論からみて、分業が確立した社会としての「商業的社会」は、「文明社会」と重なる要素を持つとともに、「未開社会」に対しては、対比対象という要素を持つものとみる。スミスの議論におけるその「未開社会」は、「商業的社会」より以前に存在したであろう、また他の地域に残存したであろう一社会モデルとしての「未開社会」である。それは、スミスの分析対象である「商業的社会」の分析を際立てるための分析装置の役割を担うものであって、それ自体はスミスの分析対象、主要関心事ではなかった。スミスの関心事は「原始的状态」（未開社会）ではなく、資本の蓄積と土地の占有が行われ、作業

場内での作業の分化、および、社会の中での異なる商品を扱う職業の分化（事実上、作業場の商品生産事業主および独立商品生産者たちによる社会的分業）が行われ、貨幣が取引・交換の普遍的用具として使用される「文明社会」であり、そのような分業が完全に確立している社会が商業的社会なのである。

そして筆者のみるところでは、スミスは、文明社会の富裕を支える分業、その分業を支える交換、その交換を容易にするものとしての貨幣といった脈絡で、貨幣が考案、使用されるに至った経緯の説明をなした。またそこでは、鋳貨の改悪といった問題をはらみつつも、貨幣が、文明国、分業が確立している商業的社会において、商業の普遍的用具となり、この用具の媒介によって財貨が売買、交換されている、ということになるのであった。『国富論』第1篇の主題を、労働の生産力の改良の原因と、労働の生産物が社会の様々な階級や境遇の人々の間に自然に分配される秩序、とするスミスは（WN, [I]. 5. 大河内訳 I, 3頁）、第1篇第4章において、冒頭での「商業的社会」に関する言及に続いて、前でみたようなものとしての貨幣に関する議論を示したうえで、財貨を貨幣と交換したり財貨を相互に交換したりするに際して人々が自然にまもる原則、財貨の相対価値あるいは交換価値と呼ばれるものを決定する原則を論じるとし、いわゆる「価値のパラドックス」への言及をつうじて、研究対象を「使用価値」ではなく「交換価値」とすることを明示し（WN, Liv.12-13. 大河内訳 I, 49-50頁）、第5章から第7章のテーマを提示する（WN, Liv.14-18. 大河内訳 I, 50-51頁）。スミスは、上述のような脈絡で、貨幣が考案、使用されるに至った経緯を説明したうえで、その貨幣的現象の奥にある交換の論理を明らかにし、そしてそれをつうじて、文明社会における富裕の分配、文明社会において労働の生産物が社会の様々な階級や境遇の人々の

間に自然に分配される秩序の問題に進もうとするのである。

スミスの議論における「用いられる労働」と「投下された労働」とは区別して理解されるべきことを強調する星野（2019）は、例えば、スミス価値論は「文明社会」を律する「投下された労働」（「元本」）による付加価値論に一元化され、「商業社会」はその基礎概念を設定する場として位置づけられる、とする。しかし、筆者のみるところでは、『国富論』第1篇第5章から第7章は、上のようなものとしての「交換価値」に関する議論が展開されるのである。もちろん付加価値も交換価値を持ちうるし、そこでの、価格や生産物からの、分配分としての賃金、利潤、地代は、付加価値からの分配分である。だが、そこでスミスが直接的に論じようとしているのは、交換の論理であり、交換価値なのである。

『国富論』第1篇での価値分析においてスミスが扱おうとしたのは交換価値とみる点では、小林（1973）、小沼（1983a, 1983b）、またカーリル（1991）も同様である<sup>18)</sup>。

そして、同じく第1篇での価値分析においてスミスが扱おうとした価値を交換価値とみるリカードウは、「社会の初期の段階（early stages of society）においては、これらの商品の交換価値、すなわち、一商品のどれだけの分量が他の商品と交換に与えられるべきかを決定する原則（rule）は、ほとんどもっぱら各商品に支出された労働（labour expended）の比較量に依存する」としつつ、事実上、『国富論』第1篇第5章第2段落中の文言および第6章第1段落を引用し、そこでの投入労働量による価値の規定という考えを妥当なものとして捉える。そのうえでリカードウは、本稿注12で触れたように、スミスの議論ではそのような「支出された労働」、「投下労働」が、第5章第1段落にみられるような「支配労働」と混同されており、また

そこでは、可变的であるはずの労働の価値が、第5章第7段落にみられるように不変なものとして主張されている、とみる<sup>19)</sup>。そしてこのようなリカードの見方、とりわけ「支配労働」と「投下労働」といった見方は、一つの標準的見方として定着してきたものである。

スミスの議論における「商业的社会」をどのようなものとして捉えるかは、第1篇第5章冒頭の二つの段落（また第7段落）および第6章冒頭段落をどのようなものとして捉えるかということと深くかかわる。また逆に、後者をどのようなものとして捉えるかは、前者をどのようなものとして捉えるかということと深くかかわっているといえる。スミスの議論における「商业的社会」についての解釈は、スミス価値分析の解釈にとって重要な意味を持ちうるのである。

スミスの議論における「商业的社会」についての解釈次第では、スミスの議論は、リカードの上のような批判を回避することが可能となる。スミスの議論における「商业的社会」ということへの関心は、恐らく、一つにはこのような観点から出てきているといえる。

例えば小林（1973）の場合のように、スミスの議論における「商业的社会」は独立生産者のみが形成する満開した商品生産の社会であり、スミスは『国富論』第1篇第4、第5章でそのモデルの枠組みの中で議論を展開した、とみるとすれば、スミスが第5章の第1段落と第2段落で「支配労働」と「投下労働」を等置していたとしても、そこは独立生産者のみからなる社会であるゆえ、問題はない、ということになる。また小林（1973）の場合、第6章冒頭の「初期未開の社会状態」は、「商业的社会」とは別の社会として捉えられるため、「初期未開の社会状態」での価値規定についての議論は、「商业的社会」に関する議論とは別のもの、ということになる。

なお、小林（1976b）の場合には、社会的分業が商品生産という形で発展した社会を、スミスは「文明社会」と呼び、その素朴な段階を「初期未開の社会状態」と呼んでいる、とされるときともに、スミスのいう「初期未開の社会状態」とは、原始社会のことではなく、単純商品生産者だけが形成する社会を啓蒙主義的用語で表現したもの、ともされるのであるが、そのような枠組みにおいても、第6章冒頭の「初期未開の社会状態」は事実上単純商品生産者だけが形成する社会であって、「支配労働」と「投下労働」との等置可能、ということになる。

また、小沼（1983a, 1983b）の場合は事実上、『国富論』第1篇第5章第1、第2段落では支配労働＝価値尺度説が展開されておき、特に第2段落では、「商业社会」の一種としての生産要素が労働だけの「社会の初期未開の状態」が想定されているとみることによって、そこでの「支配労働」と「投下労働」との等置は可能、ということになる。そして、第6章冒頭における「社会の初期未開の状態」については、それは歴史的事実としての原始社会のことではなく、生産要素が労働だけの「単純化された商業社会」のことを意味する、とされることによって、そこでも、「支配労働」と「投下労働」との等置は可能、ということになる。

他方、カーリル（1991）の場合には、「商业的社会」というよりも、「資本主義的交換」と「非資本主義的交換」ということが注視されるのであるが、『国富論』第1篇第5章でのスミスの議論の暗黙裡の枠組みは、利潤、地代のない、自営生産者たちの経済における、非資本主義的交換についてのもの、とみられる。そしてカーリルによれば、スミスは第5章で「支配労働 (labor-commanded)」と「体化労働 (labor-embodied)」とを同一視するのであるが、その「支配労働」は、当該商品によって購買されうる労働の量であり、「体化労働」は、当該商品

の生産に使用 (use) された労働の量であるが、当該商品によって購買されうる労働そのものは、当該商品によって購買されうる「生きた (living)」労働でも当該商品によって購買されうる「他の商品に体化された (embodied)」労働でもありうる、とされる。また、後代の経済学者たちは、「支配労働」と「体化労働」とは互換的なものではなく、スミスの場合、「支配労働」は「体化労働」よりも大きく、その差が、「体化労働」とともに当該商品の価値を構成する利潤と地代である、と推論するのであるが、これは誤った解釈である、とされる。そして、この誤った解釈をしてきた経済学者たちは、『国富論』第1篇第5章でのスミスの議論の枠組みに注意を払ってこなかったのであって、もしその第5章でのスミスの議論の枠組みを考慮すれば、「支配労働」と「体化労働」とのスミスの同一視は適切なことである、とされるのである<sup>20)</sup>。

以上のものに対し、筆者は、『国富論』の序論および第1篇をとおしてスミスの主要分析対象となる社会は、未開社会との対比で際立たされることとなるスミスの眼前にある「文明社会」、資本の蓄積と土地の占有が行われ、作業場内での作業の分化、および、社会の中での異なる商品を扱う職業の分化（事実上、作業場の商品生産事業主および独立商品生産者たちによる社会的分業）が行われ、貨幣が取引・交換の普遍的用具として使用される「文明社会」、それと重なる分業の完全に確立した社会という一社会モデルとしての「商業的社会」、とみるのである。

そして、筆者は、スミスの議論においては「初期未開の社会状態」と「商業的社会」とは対比の対象になる関係にあるものであり、また後者の「商業的社会」では、独立生産者や労働者という労働を行う人々にとっての労働の主観的側面・労働に伴う労苦・骨折り等といったこ

とは、その社会の構成員の間では、総じて、想像・推測可能、共有可能なものであって、そこでは事実上、その社会の構成員が共有しうるそのような視点からの、商品価値、労働の労苦・骨折りといったことをあげることによって、価値尺度としての支配労働を根拠づけることは可能と考えられている、とみるのである。

そして、第6章冒頭における「初期未開の社会状態」については、そこでの「資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態」における、種々の物の獲得に必要な労働量の間の比率に従うそれらの物の交換という原則については、まず、その「資本の蓄積と土地の占有に先立つ初期未開の社会状態」は「商業的社会」とは対比の対象になる関係にあるものとみ、そして、前者の社会状態での「獲得に必要な労働量の間の比率」との対比で、スミスは、主要分析対象である「商業的社会」での交換の原則の究明に進んだ、とみるのが可能と考えるのである。

筆者のみるところでは、スミスは、交換を容易にするものとしての貨幣といった脈絡で、貨幣が考案、使用されるに至った経緯を説明しようとする第4章冒頭で、「商業的社会」という社会モデルを提示するのであった。すなわち、事実上、資本の蓄積と土地の占有が行われ、作業場内での作業の分化、また、社会の中での異なる商品を扱う職業の分化が行われ、貨幣が取引・交換の普遍的用具として使用される「文明社会」、それと重なる分業の完全に確立した社会という一社会モデルとしての「商業的社会」である。

その「商業的社会」では、独立の商品生産者が存在するとともに、作業場内分業も行われる。事実上、その社会では、資本が存在し、労働の用役・資本の用役・土地の用役も売買の形で交換され、独立生産者はもちろん労働の用役を販売する労働者も、対等な参加者として他の参加

者とともに市場に参入する。その社会の構成員は、支配と従属ではなく、私有財産所有者として互いに、自由、平等、独立した関係にあり、その社会は、私有財産の交換をつうじて、金銭的考慮に基づく交換をつうじて営まれる社会である。同時に、その社会は、生まれその他の封建的諸束縛から解放された社会である。

その社会では、地主、資本家、労働者、独立生産者はともに私有財産所有者であり、彼らの各々の報酬も正当な報酬として存在しうるのである。その社会は、今日という市場経済が営まれる社会と重なる要素を多くそなえた社会、ただし、地主階級、資本家階級、労働者階級および独立生産者たちの間には（とりわけ後者の三グループの間には）、物質的にも精神的にも相互の流動性が多く残り、彼らの間では精神的な立場の交換も容易であることが確保されている社会である。

そして、スミスの議論におけるその「商業的社会」は、「文明社会」と重なる内容をそなえた分業の完全に確立した社会である。それに対し、「初期未開の社会状態」は、「商業的社会」また「文明社会」を際立たせるために言及される比較対象の役割を担わされているのであって、「商業的社会」の枠内に組み入れられているものではないのである。

スミスが、『国富論』第1篇第5章で、「分業が……徹底的に行きわるようになったあと」の社会での真の価値尺度を論じようとするとき、このような社会での真の価値尺度を論じようとしているのである。

なお、リカードウの『経済学および課税の原理』第1章の表題は「価値について」である。マルクスの『資本論』第1巻第1部第1篇第1章「商品」、第1節の表題は「商品の二つの要因 使用価値と価値（価値実体 価値量）」である。そして小林（1973）は、本稿1でもみたように、『国富論』は資本主義の経済理論的分

析を商品の交換価値の分析から始める、とする。

たしかにスミスは彼の経済分析を価値論から始めたわけでも、商品論から始めたわけでもない。しかしスミス自身は、『国富論』の冒頭から、「文明社会」の経済理論的分析を展開しているのである。

本稿注11でみたように、水田（1964）によれば、ルソーが人類の目標として示す自然は、事実上、原始や古代ではなく、いわば第二の自然であって、誰も持ちすぎず、誰も不足しないような、平等な独立生産者の社会であった、とされる。スミスも、人間本性に即した自然な社会としての「文明社会」を考えようとしていたのであろう。スミスの経済学は、資本主義の経済理論的分析という視点からだけでなく、「文明社会」の経済理論的分析という視点からも捉えられてよいのではなかろうか。

17・18世紀ヨーロッパの状況への先祖返り傾向がみられる現在にあっては、むしろ、文明社会の経済学の原点としてスミス経済学を捉えるのがより生産的、といえるかもしれない。

## 注

- 1) 小林（1973）、42-49頁〔小林（1977; 1973）、42-49頁、小林（1976a）、164-69頁〕を見よ。中川（1977）、315-16頁も見よ。

なお、小林によれば、この「商業的社会」という概念は、スミスの場合、孤立した概念であって、『国富論草稿』には「富裕で商業的な社会（opulent and commercial society）」という語があり（Smith（1965; 1937）、pp. 332, 344、水田訳、63、95頁を見よ）、『国富論』には第5篇中に「文明の進んだ商業的社会（civilized and commercial society）」という語があるが（WN, V.i.f.52、大河内訳Ⅲ、145頁）、そこでは、独自の明確な概念を示すものとして論じられていない、とみられる。そして、「文明社会（civilized society）」という概念のほうが、スミスにとっては親しいものだった、とされるとともに、スミスの対象とした「文明社会」は、一方では『グラスゴウ大学講義』におけるような、「自由の合理的体系（rational system of liberty）」として成立する「市民社会（civil society）」という表現を与えられ、他方では「商業的社会」という表現を与えられた、とされる。詳しくは、小林（1973）、42-43頁〔小林（1977; 1973）、42-

- 43頁, 小林 (1976a), 164-165頁] を見よ。
- 2) 小林 (1973), 49-72頁 [小林 (1977; 1973), 49-72頁, 小林 (1976a), 169-86頁] を見よ。
  - 3) 小林 (1973), 68-97頁 [小林 (1977; 1973), 68-97頁, 小林 (1976a), 183-205頁] を見よ。
  - 4) 小林 (1973), 95-97頁 [小林 (1977; 1973), 95-97頁, 小林 (1976a), 203-5頁] を見よ。
  - 5) 小林 (1976b), 15, 16, 438頁を見よ。
  - 6) それについては, 中川 (1977), 315-17頁を見よ。
  - 7) 生越 (2020), 300頁。
  - 8) 詳しくは, 生越 (2020), 306-7頁を見よ。
  - 9) 生越 (2020), 307頁。
  - 10) スミスは、『国富論』第1篇では, 個々の生産主体における直接の消費を超える資材と, 市場との存在, それらを基礎付ける所有権の確立といった条件が与えられたものとして議論を展開するのであるが, この間の事情については, 内田 (1962), 136-39頁 [内田 (1988), 123-25頁] を見よ。
  - 11) 水田 (1964) によれば, ルソー (J. J. Rousseau) が人類の目標として示す自然は, 事実上, 原始や古代ではなく, いわば第二の自然であって, 誰も持ちすぎず, 誰も不足しないような, 平等な独立生産者の社会であった, とされる。水田 (1964), 65-66頁。
  - 12) 例えばリカードは, スミスの議論における, 「投下労働 (labour bestowed)」と「支配労働」との混同, 可変的であるはずの労働の価値の不変性の主張, といったことを問題にする。例えば, Ricardo (1951), pp. 13-14, 16-17, 堀訳, 16, 19頁を見よ。
  - 13) 例えば, 以下のものも見よ。Winch (1978), p. 90, incl., n. 1 (邦訳, 109-10頁, 110頁注1), Porta (1989), pp. 196-97, incl., n. 16, Brewer (1995), pp. 184-85, incl., n. 6, Hueckel (2000), pp. 467-71。
  - 14) 詳しくは, 小沼 (1983a), 75頁, 75頁注66, 77頁, 77頁注67, 小沼 (1983b), 28, 41-42頁を見よ。
  - 15) 詳しくは, 星野 (2018), 38, 64, 89, 96, 122-23, 125-26, 175頁を見よ。
  - 16) 星野 (2019), 31, 33頁を見よ。
  - 17) Khalil (1991), pp. 34-36, 45n. 1を見よ。筆者は, 中川 (2016) で, Khalil のカタカナ表記をハリールとしたが, カーリルがより正確と判断し, 本稿では, 後者の表記をとった。

なお, スミスの議論における「商業(的)社会」概念は彼の歴史の四段階説の脈絡中のもの, とみる見方は, すでにみたように小沼 (1983a) によってもとられるのであるが (75頁), 例えば生越 (2020) も, 「商業社会」は, 歴史発展四段階における最後の段階である「文明社会」や「文明化し繁栄している」社会としても表現されており, それは当初から, 独立生産者だけからなる等質的社会として想定されていなかった, といった見方をとる。注50を含め生越 (2020), 299頁を見よ。

- 18) カーリルについては, 例えば Khalil (1991), p. 35を見よ。
- 19) Ricardo (1951), pp. 12-14, 16-17, 堀訳, 15-16, 19頁を見よ。
- 20) Khalil (1991), pp. 34-36。

## 参考文献

- 内田義彦 (1962) 『経済学の生誕』 [増補版], 未来社  
 ——— (1988) 『内田義彦著作集 I』, 岩波書店  
 生越利昭 (2020) 『啓蒙と勤労—ジョン・ロックからアダム・スミスへ—』, 昭和堂  
 小沼宗一 (1983a) 「アダム・スミスの同感と「社会」の初期未開の状態」『東北学院大学論集 経済学』 92  
 ——— (1983b) 「アダム・スミスの価値尺度論」『東北学院大学論集 経済学』 93  
 小林 昇 (1973) 『国富論体系の成立』, 未来社  
 ——— (1976a) 『小林昇経済学史著作集 I—国富論研究(1)—』, 未来社  
 ——— (1976b) 『小林昇経済学史著作集 II—国富論研究(2)—』, 未来社  
 ——— (1977; 1973) 『国富論体系の成立』 [増補版], 未来社  
 中川栄治 (1977) 『『国富論』の冒頭における「分業論」について』 [広島経済大学創立10周年記念論文集], 編集発行: 広島経済大学  
 ——— (2016) 『『アダム・スミス価値尺度論』欧米文献の分析—基本的諸問題を巡って—』 (下), 見洋書房  
 星野彰男 (2018) 『アダム・スミスの動態理論』, 関東学院大学出版会  
 ——— (2019) 「スミス経済理論体系の完結性」『経済学』 (関東学院大学経済経営学会研究論集) 277  
 水田 洋 (1964) 「スコットランド歴史学派」 (内田義彦・小林 昇・宮崎義一・宮崎犀一編『経済学史講座 第1巻 経済学史の基礎』, 有斐閣, 第2編, 第1章, I)  
 Brewer, A. (1995) 'Rent and Profit in the *Wealth of Nations*,' *Scottish Journal of Political Economy*, 42 (2).  
 Hueckel, G. (2000) 'The Labor "Embodied" in Smith's Labor-Commanded Measure: A "Rationally Reconstructed" Legend,' *Journal of the History of Economic Thought*, 22(4).  
 Khalil, E. L. (1991) 'Adam Smith's Concept of Labor-Commanded: A Study in Misinterpretation,' *New York Economic Review*, 21 (2).  
 Porta, P. L. (1989) 'Adam Smith's Subjective Stance. A Comment on Professor Hutchison's «Before Adam Smith», ' *Economia delle scelte pubbliche*, 3.  
 Ricardo, D. (1951) *The Works and Correspondence of David Ricardo*, (ed.) P. Sraffa, vol. I: *On the Principles of Political Economy and Taxation*, Cambridge: Cambridge University Press. P. スラッ

- ファ編『デイヴィッド・リカード全集 I』: 堀  
経夫訳『経済学および課税の原理』, 雄松堂書店,  
1972年
- Smith, A. (1965; 1937) 'An Early Draft of *The Wealth  
of Nations* (c. 1763)' in W. R. Scott, *Adam Smit as  
Student and Professor, with Unpublished Documents,  
Including Parts of the "Edinburgh Lectures," a  
Draft of "The Wealth of Nations," Extracts from  
the Muniments of the University of Glasgow and  
Correspondence*, [Glasgow University Publications  
46], [Glasgow: Jackson], 1937; reprint ed., New  
York: Augustus M. Kelley, Part III. 水田 洋訳
- 『国富論草稿』, 日本評論社, 1948年
- (1976) *An Inquiry into the Nature and  
Causes of the Wealth of Nations*, (eds.) R. H.  
Campbell and A. S. Skinner, Oxford: Clarendon  
Press; Glasgow edition. 大河内一男監訳『国富論』  
(全3巻), 中央公論社, 1976年
- Winch, D. (1978) *Adam Smith's Politics: An Essay in  
Historiographic Revision*, Cambridge: Cambridge  
University Press. 永井義雄・近藤加代子訳『アタ  
ム・スミスの政治学—歴史方法論的改訂の試  
み—』, ミネルヴァ書房, 1989年